

# 新しいコミュニケーション理論としての 関連性理論

津 田 早 苗

## Relevance Theory as a New Theory for Communication

Sanae Tsuda

人間のコミュニケーションを考える時に避けて通れないのは、話し手の意図が相手にどのように伝わるか、あるいは、伝わらないかという問題である。話し手が、明確にことばで自分の意図を伝えようと思ったときでさえも、相手にその意図が100%伝わる保証はない。まして、自分の意図を率直に伝えることをためらう場合もコミュニケーションの場面には多くある。このようなコミュニケーションの問題について考察するのが本論の目的である。

意図の伝達の問題は、会話分析や語用論でしばしば取り上げられるが、厳密に定義をされたことはない。グライスの会話の含意の理論、ブラウンとレビンソンのポライトネスの理論、デボラ・タネンの会話のスタイルの理論などはそれぞれの立場からこの問題を扱っている。本論では、これらの理論をふまえて、この10年間注目を集めてきた関連性理論では、意図の伝達の問題をどう扱っているか、従来の理論とどこが異なるのかを明かにしたい。

### コミュニケーションとコードモデル

Sperber and Wilson (1986) は、人間のコミュニケーションの成り立ちを説明するためのモデルには、コードモデルと推論モデルの二つがあると述べている。コードモデルは、コミュニケーションを説明する際に従来から一般的に用いられてきたモデルである。発信者がメッセージを記号化し、受信者がそれを理解するこのシステムを彼らはコードと定義し、コードモデルと呼んでいる。彼らは、この二つのモデルの違いを言語学と記号論によって次のように説明している。

コードモデルを利用することによって長足の進歩を遂げたのは言語学である。言語学においては、文の意味を研究する際にも記号化されたメッセージを対象とし、その場の状況は排除して分析を行うのが普通である。よって、コードモデルがそのまま適用されるのである。しか

し、文化をメッセージとしてとらえようとする記号論では、その研究対象は言語のようなコードであるとは限らない。記号論学者は神話や建築や儀式はあるメッセージを伝えると考えたが、これらの意味は言語の構造がメッセージを伝える伝え方ほど予測が可能なものではないのである。つまり、記号論においては文化一般までも記号化されたメッセージであると考え、その構造をコードモデルによって記述しようとしたが、期待されたような発展がみられなかったと Sperber and Wilson (1986) は指摘する。

Sperber and Wilson (1986) はさらに人間のコミュニケーションは文の意味の解明だけではなく、話し手の思想がどのように受け取られるかの問題が加わる。つまり、コミュニケーションに関してはコードモデルだけでは不十分で、以下に述べる推論のモデルが必要だと彼らは主張するのである。彼らは認知心理学の立場からコミュニケーションをとりあげているので、送り手の意図、メッセージ、受け手の解釈などがコミュニケーションの研究対象であると規定する。つまり、彼らのコミュニケーションの定義は、記号論者のように衣服、料理、建築などすべてをコミュニケーションであると解釈する広義のコミュニケーションの定義をとらない。この指摘は、コミュニケーション研究にとって大変貴重であり、また重大である。記号論や文化人類学を基礎としたコミュニケーション研究においては、文化とコミュニケーションはしばしば同じ意味で用いられ、その研究対象も衣服、神話、儀式など多岐にわたっている。それにもかかわらず、これらの対象の分析をコードモデルのみによって行ったところに彼らの限界があったと Sperber and Wilson (1986) は指摘しているのである。

### コミュニケーションとメッセージの送り手の意図

上に述べたように、コミュニケーションに関与するのは、記号化されたメッセージだけではない。送り手の意図が話し手によってどのように解釈されるかが明らかにされなければならない。Sperber and Wilson (1986) は、Grice (1975) の提議した推論の問題がコミュニケーションに重要な役割を持っていることを指摘し、これを推論モデルとよぶ。Grice は発話の理解の多様性を説明するためには、人がある特定の発話意味をどのように推論するか注目する必要があると指摘した。

抽象化された文の意味の記述する言語学的な意味の分析においては、コードモデルは有効であった。しかし、コミュニケーションにおいて問題となるのは文の意味ではなく発話の意味である。発話の意味とは話者の意図や前後のコンテクストを含むメッセージの意味のことであり、従来の言語学の意味論では扱われなかったものである。発話は話者の思考を伝えるだけでなく、伝えられる内容に対する話者の態度も含むのである。ここにコードモデルの限界があると Sperber and Wilson (1986) は指摘するのである。

同じ文がコンテクストによって幾通りにも解釈される事実を説明するには、意味理解の原則

が必要であるとグライスは考え、それを会話の協調の原理と会話の公理によってあらわした。Sperber and Wilson (1986) は、このような推論の部分にまでコードモデルの考えを導入するのは間違っていると主張する。言語コミュニケーションの理解には、コードモデルの考えは不可欠だが、それですべてを説明するのは妥当ではなく、推論モデルが大きな役割を果たす部分があると指摘しているのである。

Sperber and Wilson (1986) の理論が従来のコミュニケーションの理論と異なるのは、コードモデルと推論モデルとを区別し、推論モデルの理論化を提案したことにある。推論モデルで中心となるのは話者の意図である。コミュニケーションは広義にとらえれば、送り手に何かを伝える意図がない場合にも受け手がメッセージを受け取れば成立するが、彼らはメッセージの送り手に意図がある場合にコミュニケーションが行われると考え、記号論者達が考えた文化すべてがコミュニケーションであるという考えを捨てている。

### 送り手の意図とは何か

Sperber and Wilson (1986) は、コミュニケーションにおいて Grice の提議した推論の問題は不可欠であると指摘しているが、かれのアプローチをすべて受け入れているのではない。彼らはコミュニケーション研究にとって重要なのは、人間はどのような形で情報を共有し、どのように利用しているか、また、適切な情報はどのように得られるのだろうかの問題であると述べている。つまり、話者の意図を受け手が解釈するメカニズムがどうなっているかが、推論モデルの中心課題となるのである。

ある人が発話その他の行動によって何かを相手に伝える時に意図するのは次のようなことである。第一に自分の発話などが相手に反応を引き起こすこと、第二に話者の意図に相手が気づいた結果何かの反応をすることである。すなわち、コミュニケーションにおける意図は、二重構造をしていると考えられる。彼らをこの二つを次のように区別する。

Informative intention : 相手に何かを伝えようとする意図

Communicative intention : 相手に Informative intention を伝えようとする意図

(Sperber and Wilson p. 29)

通常の場合、相手に何かを伝えようとする意図 Informative intention が満足されれば、それを相手に伝えようとする意図を相手に伝えること Communicative intention になるので、二つの意図が満足される。しかし、Sperber and Wilson (1986) は Informative intention が満足されなくても Communicative intention が満足される場合もあると次のような例をあげて説明している。メアリーがこわれたヘア 드라이アーをピーターに直してもらいたいが、それを言

わずに床にこわれたドライヤーをころがしておいたとする。そして、ピーターがそれに気がついた場合 Informative intention を表明することなく Communicative intention が満足されているといえる。このような場合もあるので、これらは別々にあつかわれなければならないと彼らは主張している。つまり、コミュニケーションにおいては Informative intention がどの程度相手に明らかにされるかが重要な問題となるといえる。そして、その意図を受け手がどうやって正確に解釈するかがもう一つの大きな問題となるのである。

### 会話の含意と共通の認識

話し手の意図は相手にどう伝わるのだろうか。メッセージの送り手の意図はどのように伝わるのだろうか。Griceはこの問に対して、会話における協調の原理と会話の公理を提案した。人が会話をしている時、いちばん会話の目的に沿うように相手を理解するように行動し、話の内容も相手の理解に必要な量の情報を与え、相手が間違った情報を得ないように質・適切性・明瞭性などに配慮して会話をしているのである。しかし、Griceは日常のコミュニケーションでは、しばしば上の会話の公理に反するようなコミュニケーションが行われることに注目した。Sperber and Wilson (1986)は次のような例をあげている。

Peter: Do you want some coffee ?

Mary: Coffee would keep me awake.

(Sperber and Wilson p. 34)

上の文においてピーターの「コーヒーを飲む？」という質問に対して、メアリーは直接には答えていない。「コーヒーを飲むと目が覚めるわ」という彼女の答えからピーターは彼女がコーヒーを欲しいのか欲しくないのかを推測をして判断をしなければならない。通常の場合、Peterはこの返事からMaryの意図を正確にくみ取ることができる。このような間接的な答えから相手の意図を推測するような会話を会話の含意 Implicature と呼ぶが、このような推論がなぜ可能なのかに関して、Sperber and Wilson (1986)は人間の認知能力の働きから、コミュニケーションにおける推論に対する妥当な説明をしようと試みている。

コミュニケーションは、お互いに共通の理解があるので可能であるという説明が従来なされてきた。彼らは共通の理解という概念を明らかにするために、分析対象を認知的な能力に限って、manifest (明示的) という概念を使って定義している。人がある事実を認識すること、その真偽を判断できる時、その事実が明示的だといい、明示的であるそのような事実の集合を cognitive environment 認識的な環境と呼ぶ。私たちの認識的環境は、認識したり推論したりすることのできる事実の集合から成り立っている。私たちの認識する肉体的な能力と周りの環

境の両方が認識的環境を作っているといえる。どのような外界を認識するかは、個人の過去に獲得した知識にもよっている。

ここで重要なのは、Sperber and Wilson (1986) が、私たちの認識的環境においてすべての事実が同じように明示的なのではなく、私たちのそれらに対する認識には、明示性に関して段階があると説明している点である。私たちの認識能力は、あるものははっきりととらえ、あるものには関心をはらわないという特徴を持っているのである。外界には、存在し人の認識の対象となっているものは明示的であるが、それらを常に認識したり、知識としてもってわけではないのである。また、同じ人が同じ場所に居合わせても、同じ認識をもつとは限らないと彼らは指摘する。二人の人が同じ場所にいてるとき、共通の認知環境 *mutual cognitive environment* にいるといい、そこでは、さまざまな事実がふたりに共通に明示的 *mutually manifest* であるという。

このような定義をした上で彼らは、推論がどのようにはたらいて上のような会話に対する理解が成立したのかを説明する。彼らはそれを関連性の理論と呼んでいる。

### 関連性とは何か

上に定義されたように、私たちは限りないほどの数の事実に囲まれている。その中のどれをもっとも認識し、理解するかに関して Sperber and Wilson (1986) は、関連性という概念を提案している。彼らによれば人はもともと情報をプロセスする能力を持っている。無限にある事実の中からどのような事実を選択するかに関して、彼らは、私たちの認知能力はまわりの認知環境の中から、自分の周囲に対する理解が改善されるようなものを認識するように働くと主張する。そして、自分の周囲にたいする理解が深まれば深まるほど、自分のまわりの世界に対する理解が深まっていくのである。

短時間に行われるコミュニケーションを考えた場合はどのような原理が働くのであろうか。自分のまわりに古い情報と新しい情報があったとき、古い情報はすでにわかっているので、認識する必要はない。そして、新しい情報が、自分のもつ古い情報とつなぎ合わさって何かの意味を持つとき、Sperber and Wilson (1986) はそれを *relevance* 関連性をもった情報と呼ぶ。つまり、どのような情報でもよいから認知するのではなく、人は関連性のある情報を選択して理解しているのである。これが、彼らの提案する推論モデルの基本概念なのである。

彼らは、次のような例をあげて関連性の概念を説明している。Mary と Peter が公園のベンチに腰掛けている。Peter が突然、姿勢をそらした。彼が姿勢をかえたことによって Mary は 3 人の人が見えた。一人はアイスクリーム売りで、彼女はすでにその存在を知っている。もう一人は、知らない人である。もう一人は、William というひどく退屈な友人である。Peter が体をそらすことによってもたらされた有益な情報は、William が二人の方に歩いてくること

だということを Mary は認識する。人は自動的にもっとも能率的な認識をするようにできているのだと彼らは主張しているのである。

### 意図の明示と推論

Peter の姿勢をかえる動作は、常にこのような意味を持つとは限らない。しかし、この場においては Mary は Peter が意図的に彼女が遠くの人に注目するように姿勢を変えたと考えるのである。このようなコミュニケーションの意図を明らかにすることを ostention 意図明示と呼ぶ。相手に何かの意志を表示する時には、それなりの理由があると通常のコミュニケーションにおいては考えられるからである。つまり、人は何かの意図を相手に伝えたいときには、それを明示するのが普通であるので、メッセージの受け手はそれを手がかりにもっともその場において関連性の高い解釈をするというコミュニケーションに関する仮説を Sperber and Wilson (1986) は提出している。

コミュニケーションにおける解釈についての理論に加えて、Sperber and Wilson (1986) はコミュニケーションにおいて伝えられるものは何かに関しても新しい見解を提出している。彼らは、次のようなコミュニケーションの例をあげてコミュニケーションにおいて伝えられるのはコードモデルの提案するような意味とは異なると説明する。説明のために彼らは次のようなことばによらないコミュニケーションの例をあげている。メアリーが家に帰ると家の入り口でガスのにおいがする。彼女は、鼻でにおいを嗅ぐしぐさをピーターの前でする。ピーターはこれに気づき、家の入り口で自分もおいを嗅いでガスのにおいに気づく。このようなコミュニケーションは、ことばにおきかえてもつたえられるようなメッセージである。しかし、同じにおいを嗅ぐ動作でも、次のような場合はどうであろうか。ピーターとメアリーは海辺に到着したばかりである。メアリーは窓をあけて、外気を気持ち良さそうに嗅ぐ。ピーターも同じように、外の空気をすい都会とは異なる気持ちの良い海辺のにおいにひたる。このような場合は、メアリーがあらわした気持ちとピーターが感じた気持ちは、ガスのにおいの例とは異なり、必ずしも同一の気持ちが伝わる必要はない。

ことばによるコミュニケーションにおいても Sperber and Wilson (1986) は、このような現象が見られると指摘する。そして、従来の会話の公理や推論においては、話者の意図がはっきりしていることが前提でそれをどの程度はっきり言うかに焦点があてられてきた。その場合には、聞き手の解釈は、割合に一義的に決定できると言える。そのような例として前にあげた次の会話があげられている。

Peter: Do you want some coffee?

Mary: Coffee would keep me awake. (Sperber and Wilson, p. 56)

上のような例においては、前後の状況から判断すればメアリーがコーヒーを欲しているかいないかは容易に判断できる。しかし、次のような会話の場合は、解釈が多様であるのでどのように説明されるかが、従来の理論では明確でなかったと彼らは指摘している。

Peter: What do you intend to do today ?

Mary: I have a terrible headache. (Sperber and Wilson, p. 56)

## 二つの意図の区別

Sperber and Wilson (1986) は、このような問題が見過ごされてきたのは、コミュニケーションによって伝えられることを命題としてあらわされることに限ってきたからでないかと指摘している。人は、命題としてあらわされる以外のどちらにでもとれるあいまいなメッセージを送ることが多いのだというのが彼らの理論の出発点なのである。そして、このようなあいまいなメッセージも説明することができるように、彼らはコミュニケーションのモデルをある意図がメッセージとして相手に伝わるかどうかというコードモデルであると考えず、あるメッセージを伝えようという意図がどのくらい明示されるかに注目し、上に述べたように Informative intension と Communicative intension とを区別し、メッセージに対する推論がどのように行われるかに関しての分析を展開している。

メッセージを伝えたいという意図を明示することは、メッセージが相手に伝わり易いことは当然だが、Sperber and Wilson (1986) は、意図の明示は相手の認知環境を変化させるという新しい概念を提案している。そして彼らはこれを Ostensive-inferential communication と呼び、これはコードモデルとは異なるコミュニケーションの方法であり、日常の言語コミュニケーションにおいても重要であると主張している。

## 結 語

上にのべたのは、関連性理論の概念的な導入である。このような関連性の理論によって従来の会話の公理が一義的に決定することが可能であれば画期的な理論であるといえる。また、関連性理論においては、従来あまり触れられなかった話者の意図に関する理論が展開されている。これがどのように間接的なコミュニケーションを説明することができるかにふれることができなかったが、これについては稿をあらためて論じる予定である。また、関連性理論についても細部まで触れることができなかった。これについてもさらに研究を深め、問題点を指摘しようと考えている。

## 参考文献

- ブレイクモア・ダイアン, 武内道子・山崎英一訳『人は発話をどう理解するか: 関連性理論入門』1992  
福島真人「「儀礼」の意味というパラドックス」『月刊言語: 特集関連性理論の可能性』1995年4月号.  
pp. 56~63.
- Grice, H.P. 1968. "Logic and Conversation," Steven Davis ed. *Pragmatics: A Reader*. 1991. Oxford:  
Oxford University Press.
- 橋元良明「沈黙の意味」『月刊言語: 特集関連性理論の可能性』1995年4月号. pp. 40~48.
- 今井邦彦「関連性理論の中心概念」『月刊言語: 特集関連性理論の可能性』1995年4月号. pp. 20~29.
- 西阪仰「関連性理論の限界」『月刊言語: 特集関連性理論の可能性』1995年4月号. pp. 64~71.
- 西山佑司「言外の意味をとらえる」『月刊言語: 特集関連性理論の可能性』1995年4月号. pp. 30~39.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson, *Relevance: Communication and Cognition*. 1986. Blackwell. Oxford.
- 菅野盾樹「エロキューションとしての言語」『月刊言語: 特集関連性理論の可能性』1995年4月号.  
pp. 72~83.
- 田中圭子「広告を読み解く」『月刊言語: 特集関連性理論の可能性』1995年4月号. pp. 41~48.